認知症 地域で重症化防止

厚労省、全国でモデルづくり

認知症の人が住み慣れた地域で暮らせる社会を目指す「認知症施策推進5カ年計画（オレンジプラン）」が4月から始まった。柱の一つが、認知症の症状を悪化させないように早期に対応する「認知症初期集中支援チーム」を全国に普及させることだ。人口や医療・介護の施設、担い手の条件が異なる各地域に対応したモデルをつくるため、厚生労働省の研究事業が仙台、東京、福井の3地域で進んでいる。早期対応で、重症になるのを防ぐなどの効果が報告されている。

認知症で記憶を失っても適切な支援ができるように、生活習慣を聞き取る看護師の片山智栄さん＝4月、東京都世田谷区

診断シート作成／医療機関 調整役に

「症状落ち着いた」効果も

仙台

仙台市では、介護や福祉の相談窓口となっている市内49カ所の地域包括支援センターが対応の中心。東日本大震災後、認知症の相談が増えたこともあり、認知症の早期発見と対応、本人と家族の支援、地域の支援体制づくりなどをセンターの業務として明確にした。今後、初期支援のマニュアルを完成させる予定だ。

仙台での研究を担当する東京都健康長寿医療センターの粟田主一研究部長が認知症を診断するための質問シートを作った。「5分前に聞いた話を思い出せないことがありますか」といった問いに「まったくない」から「いつもそうだ」まで4段階で答えていくと、認知症の人の症状や生活課題を評価できるようになっている。

粟田部長は「支援体制は十分とは言えない。センターの人手を増やし、職員の知識と技能を充実させる必要がある。医療機関との連携も大切だ」と話す。

東京

東京都世田谷区では、桜新町アーバンクリニックの訪問看護ステーションで相談を受けている。

今年1月ごろ「妻が財布を盗まれたと騒ぐ。私に殴りかかってくる」と男性から電話があった。看護師の片山智栄さんが訪問。妻の不安や不快感の理由を聞き取り、言動の原因を探った。男性には妻の生活ぶりを質問した。

認知症専門医の診察を妻に受けてもらい、他の医療機関で処方された薬を見直し、幻覚や妄想、興奮を起こさないように調整してもらった。ケアマネジャーには、介護保険の申請を依頼。風呂でおぼれたり、段差で転んだりしないように、浴槽に滑り止めマットを敷き、手すりを付けた。「自分でできることは続けてもらえるように支援している」と片山さん。男性は「片山さんに話を聞いてもらってから、妻は落ち着いた」とほっとした様子で話す。

認知症の人を診察する玉井顕院長＝5月、福井県敦賀市の敦賀温泉病院

福井

福井県敦賀市の敦賀温泉病院。同県から認知症疾患医療センターに指定されている。玉井顕院長は「往診や講演などによって、認知症の知識を広げたことで、早めに診察を受けに来てくれる人が増えた。徘徊や暴言・暴行などの重い症状の人を入院させるケースが減った」と話す。

「家族を思いやる余裕が出てきた」「大きな声で怒鳴ることがなくなった」。受診後、認知症の人の変化について、家族が書いたアンケートだ。症状が落ち着き、安心した様子が読み取れる。

認知症の初診者数と入院者数の比較

	A町	B町
65歳以上人口／人口	31%	29%
認知症サポーター／人口	14%	46%
初診者数	92人	136人
入院者数	30人（再入院は5人）	10人（再入院は1人）

※総務省、NPO法人地域ケアネットワーク、敦賀温泉病院のデータから作成

知識普及で入院減少

認知症の人に早期受診を促すには知識の普及が重要で、結果として入院も減少することを裏付けるデータを敦賀温泉病院（福井県敦賀市）は報告している。

敦賀市近隣のA町（人口約1万1千人）とB町（同約1万6千人）は共に、65歳以上の人の割合が約3割。認知症の知識を学ぶ講座を受講し、認知症サポーターと認定された人の割合（2013年3月末現在）は、A町が約14%に対し、B町は約46%だ。

同病院によると、昨年の認知症の初診者数はA町が92人、B町が136人。一方、入院者数はA町延べ30人（うち再入院は5人）、B町延べ10人（同1人）と3分の1。認知症の知識がある人が多いB町では、重症になる前に受診する人が多いため、初診は多いが、入院は少ないとみられる。

認知症の人が精神科病院に入院する平均日数は約944日（10年度）。入院する人を減らし、医療費を抑制することがオレンジプランの目標の一つだ。

空海 留学中に入手の写本

国内4ヵ所の文字書体文献「古今文字讃」

文字書体の文献「古今文字讃」の写本写真

高野山大研究所鑑定

「書道史上 重要な発見」

国立国語研究所（東京都立川市）など国内4カ所に所蔵されている文献が、空海が唐に留学中に入手した文字書体の文献「古今文字讃」の写本と分かり、鑑定した高野山大密教文化研究所（和歌山県高野町）の大柴清円受託研究員が発表した。

空海の詩などを集めた「性霊集」の中で、814年に空海が嵯峨天皇に献上した書物の一つとして記されている。大柴研究員は「空海が中国で、さまざまな書体を学んだことが分かる。書道史上で重要な発見」としている。

ほか3カ所は、四天王寺大（大阪府羽曳野市）、名古屋大、東京大。国語研究所と四天王寺大の写本は室町時代のものとみられる。

古今文字讃は、一つの漢字について、隷、楷、草書とは異なる21種類の書体を紹介し、創作者と由来を述べている。

国語研究所には3巻あり、46文字について書かれていた。

大柴研究員は「各研究機関も写本の存在には気付いていたかもしれないが、膨大な文献を所蔵しており、書名だけから空海と結びつけるのは難しい」としている。

地球温暖化影響 赤道域の成層圏 東西の風弱まる

海洋研究機構など英誌に発表

地球温暖化によって、赤道域の上空約18～50キロの成層圏を東西に流れる風が、過去60年間にわたって弱まり続けていることを、海洋研究開発機構などのチームが発見し23日付の英科学誌ネイチャーに発表した。

この影響で、赤道域から北極や南極にオゾンを運ぶ風は逆に強まっているとみられる。海洋機構の河谷芳雄主任研究員（気象学）は「破壊されたオゾン層回復の予測に役立つ成果だ」としている。

チームは、1953～2012年に赤道周辺の上空で気球を使い観測された風のデータを解析。東西の風の強さが60年間で35%弱まっていることを見つけた。

これを基に計算したところ、東西の風が弱まったのは、赤道域で発生する上昇流が温暖化によって強まったことが原因との結果になった。上昇流は成層圏より低いところで発生するが、強まっても秒速0.3ミリ程度とみられ、直接観測されたことはない。

この上昇流は、上空で北極や南極方向に広がると考えられており、赤道上空で生成されるオゾンを極域に運んで、オゾン層の穴のオゾンホールを埋める働きをするとみられている。